

創 立 3 0 周 年 記 念 の つ ど い

30周年記念のつどいは、敦賀市の共催を受け、敦賀市長米澤光治様、市議会議員馬淵清和様のご臨席のもと、あいあいプラザで行われ、70名の参加がありました。

挨拶やご祝辞の中では、男女共同参画社会の実現に尽力された諸先輩の方々への敬意と、これからの進む道を示していただきました。もっと敦賀が好きになる温かな男女共同参画社会をめざし、飛躍するためには人のエネルギーが必要で、一人ひとりが性別に関係なく活躍できる敦賀にしたいという熱い思いが語られました。

続いて30周年のあゆみがスクリーンに映し出されました。平成5年度の敦賀女性ネットワークの設立総会に始まり、行政との対話や多世代との交流、啓発活動、更に他県視察や様々な学習会の実施等、時代の流れの中で多くの活動を行ってきたことが懐かしく思い出されました。



記念講演 川村 俊彦氏

「近代敦賀の歩み～港と敦賀～」

敦賀在住の歴史家であり博物館館長でもあった川村俊彦先生から、敦賀の近代史についてご講演いただいた。

良港を持つ敦賀は、明治以前から北前船などでの物資輸送を担っていたため、新政府の殖産興業政策の一環として鉄道がいち早く整備された。明治15年には長浜・敦賀間の鉄道が開通した（17年に柳ヶ瀬トンネルが完成し、長浜・敦賀間全線開通）。鉄道黎明期の敦賀の賑わいや、現存する鉄道遺産を紹介された。



しかし、敦賀以北への鉄道の延伸と共に、敦賀の賑わいはなくなっていった。銀行家大和田莊七は、国内輸送から海外貿易への転換を図ることに助力し敦賀は再び国際貿易港として活気づいた。明治39年に外国人向けに敦賀ホテルが開業し、40年に

敦賀・ウラジオストク直通定期航路に新造船「鳳山丸」が就航した。この頃はまだ大型船が接岸できなかったため舢舨（はしけ）と呼ばれる小型蒸気船が大型船と陸とを往来していた。大正2年に大型船が接岸できる港が整備された。多くの人々が敦賀を経由して外国に行き来していたことが文献に残されている。昭和14年には「杉原ビザ」を持ったユダヤ人難民が上陸し敦賀の人々が暖かく迎えたことは敦賀の誇りでもある。

しかし、この後敦賀は軍事港となり、昭和20年の度重なる空襲、模擬原爆の投下により市街地の8割が罹災した。

近代敦賀の光と影の歴史を振り返ることで、これからの敦賀を作っていく一助としてほしい。平和な世の中もっと女性が大きな意思決定の場に参加する世の中を願っている、と締めくくられた。



活動紹介 敦賀高校創生部

「これからの敦賀を担う高校生のチャレンジ」

敦賀高校「創生部」6名の皆さんに活動紹介をしていただいた。

コロナを理由とした差別や人権侵害が各地で起きていることを知り、差別のない敦賀にしたいと考え、ホロコーストの学習を始めた。そして中谷剛さん（アウシュビッツ博物館ガイド）の「歴史を知ること、なぜ起きたかを考え、繰り返さぬよう行動すること」という言葉に感銘を受けた。敦賀は、差別されたユダヤ人を受け入れた歴史がある。この多様性に寛容で国際色豊かな当時の雰囲気を感じれば、敦賀に差別など起こらないのではないかと考え、そのための実践として、ムゼウムでガイド活動

を行っている。しかしムゼウムに来られる方たちは元々人権意識が高い。さらに多くの人たちに人権の大切さを伝える活動をしていきたいと考えている。ロシアのウクライナ侵攻によりウクライナの伝統料理が消滅の危機に瀕していることを知り、ポルシチに敦賀のアカカンバを使った「ツルシチ」を開発した。また敦賀市の応援を受けポーランドへ行き、「ポンチキ」と出会い、「敦賀ポンチキ」の開発を行っている。

彼女たちの「物事を自分のこととして捉え、無関心にならずアクションを起こす。人権意識を高め敦賀の魅力を作っていく。敦賀を良いまちにする。」と力強くあがる声に明るい未来を感じた。

敦賀の歴史を知り、男女共同参画のあゆみを振り返り、これからの敦賀に若人の息吹を感じました。もっともっと敦賀が好きになる活動をしていこう。そんな気持ちの高鳴りを感じたつどいでした。